

語法・辞書の研究

八木克正

はじめに

研究者としての成長を示す機会の第1段階は、研究会や学会で発表することである。研究会や学会で発表して、ある程度自身の研究内容に自信がもてるようになると、専攻論文にまとめて紀要に発表する運びになる。これを第2段階としよう。このような修業と経験を積んで、次は、厳しい査読がある学会誌に論文を投稿し、審査を経て掲載される。これは第3段階である。学会誌は編集委員あるいは査読委員が原稿を丹念に読んでコメントをくれるから、これほど勉強になることはない。他人にあれこれ言われるのは煩わしいなどと考えてしまうと、みすみす勉強のチャンスを失うことになる。また、何かの機会に、論文集として1冊の本の一部になって出版されることもある。論文集も編者が査読するから、学会誌と同じような執筆者と編者のやり取りが必ずある。だからまたとない恵まれた機会となる。

本稿で取り上げる業績はこの第3段階以上のものが中心になる。紀要論文や同人誌掲載論文も本稿筆者の手に入れれば取り上げたいと思うが、寄贈いただくこともほとんどないので、取り上げる機会もない。

さて、第2、第3段階の論文がある程度の数ままとすると、次は、著書として出版するという第4段階になる。しかし、第2、第3段階と第4段階の間には高いハードルがある。

1冊の著書にするためには、首尾一貫した記述が必要であるし、用語や言葉遣いも一貫している必要がある。こういう首尾一貫性をもたせる作業は、出版社の編集部が実力を発揮するところである。一方、著者は自身の原稿に対して責任を果たすために、論文の中身を精査し直す必要がある。その時に、著者がいくら頑張っても如何せん一人の力には限界がある。だから、信頼できる人に読んでもらって意見を求める必要がある。このように、第4段階になると、原稿は一人で書けるが、いろいろな人の世話にならねば良い本にはならないことを実感することになる。

本稿筆者の私の場合は、著書にする前に必ず原稿段階で数人の人に読んでもらって意見を求める。その上で原稿を出版社に渡しても、必ず編集部からいろいろな注文が出る。このようにして、著者の原稿の数多くの問題がただされて改良されてゆく。

上に述べたのは一般論であって、もちろん、研究会や学会発表などを一切せずに論文を書いたり著書をだしたりする人もある。研究会や学会で発表すると、あれこれ意

見が出るから面倒なものだ。しかし、研究者が自身の研究成果を他の研究者と共有し、意見を戦わせないで、良い研究成果が生まれるものなのか、本稿筆者ははなはだ懐疑的である。学会誌などに投稿してぜひ第三者と意見を戦わせていただきたい。

第4段階の専門的な著書を出す機会に恵まれると、次の段階は、自身の研究全体を俯瞰するような概説を書いてみたい、あるいは、研究成果をわかりやすく解説した著書にしたいと考える場合もあるだろう。これは第5段階である。上に述べた段階は一直線ではなく、行きつ戻りつする。

本稿の記述の配列には上のような考え方が背景にある。2017年度も、実証的研究や辞書の分野では実り豊かな年度であった。また、2017年度は大部な文法書の翻訳の刊行が始まったので、最初の2分冊をとりあげてみた。特色ある辞書もいくつか出ている。詳しく難しい方へ向かった英和辞典の方向とは違った傾向の辞書を紹介してみよう。

1. 論 文

『英語語法文法研究 第24号』（英語語法文法学会編、開拓社、2017.12.25）所収の論文を紹介する。

1.1 シンポジウム

以下の3つの論文は、2016年10月22日に奈良大学で開催された英語語法文法学会第24回大会シンポジウム「Spoken EnglishとWritten Englishをめぐって」における口頭発表がもとになっている。

1.1.1 内田聖二「ダイクシス、あるいは時間・場所・人称の一致について」

間接話法になった場合の時制の一致や場所、人称の一致には例外が少なくない。時制の一致の例外とは、例えば、4時に終わるはずのイベントが延びて約束に遅れた人が、“They gave me a timetable for this and it *ended* at four.” (this も it もイベントを指す) と言うような場合である。実際には4時に終わっていないのに“ended at four”と言っているのは、一般的な文法でいう時制の一致の原則には合わない。そのような一見例外に見えるような現象を、関連性理論の立場にたって、メタ表象の観点から、話し言葉、書き言葉、あるいはテキストを統一的に説明しようとする試みである。

1.1.2 赤野一郎「コーパスでできること——量的分析から質的分析の深化へ」

コーパスを使った言語研究は、量的な研究に留まらず、そこから質的な研究へと深化しなければならない。量的研究の例として、ジャンルごとの法助動詞の出現頻度（例えば、will は応用科学、商業・金融、世界事情の分野で使用頻度が高い、など）の研究

を紹介する。次に、量的研究から質的研究へと深化させた研究として、ぼかし表現の kind of, sort of の分野別の頻度調査から、これらの表現の語用論的な役割を論じた論文を紹介している。最後に具体的実践例として、分詞構文が主節に対して、前置、中間、後置のどの位置に来るかを量的に調べ、なぜそれぞれの位置にくるかについて意味的な考察を加えている。

1.1.3 澤田茂保「Spoken language における構造的な特徴について—断片化の諸相」

話し言葉に特徴的な「断片化」について考察している。断片化には、主節の分離(例: I think が独立して文末に来る場合)と、欠落(例: What happened? *Because you look so pale.* この発話の後半は、「なぜこんな質問をするのか」という主節の部分が欠落している)がある。欠落のうち、主節が談話の中で消失する場合(例: 上にあげた because 節の主節の消失)と機能語が状況の中で消失する場合(例: [It's] Too bad [that] it's in storage. の [] の部分の消失)を扱う。このような現象は、話し言葉の、場面とりアルタイムという特性から生じるものである、とする。

1.2 論 文

今回は論文数は例年に比べて少ない。

1.2.1 植田正暢^{まさのぶ}「はねかえりの off—認知意味論的考察」

Simply throw the ball off the wall, field it and throw it again. の文の throw the ball off the wall の部分は「壁に向かってボールを投げてはねかえさせる」の意味をコンパクトに表現している。この「はねかえりの off」は、「着点指向」ではなく「基点指向」の前置詞であり、bounce, cannon, deflect, echo, rebound, reflect, ricochet のような「はねかえり動詞」と共起しやすいという。

1.2.2 出木孝典^{でみず}「fall と自動詞 drop—物理的下方移動を表す場合の使い分け」

fall と drop を比較すると、fall は自動詞用法のみで、drop は自動詞と他動詞の用法があり、2語の意味関係は drop = (let) fall と表すことができるとされてきた(他動詞の意味をもつことを let で表すのは、強制するというよりは、引力に引かれるようにさせるの意味だから)。それが正しいとすれば、fall と drop の関係について残る問題は、fall と drop が自動詞の場合同義かどうかである。fall の主語が人の場合に意図的の意味をもてるか(結論は、もてない)、落下方向が垂直かそうでないか、着点の有無、完結性の点で違いがあることを論じる。

1.2.3 西田光一「英語の記述内容の豊かな名詞句の同一指示用法と対話の定式化」

Five days before Collins died on Sept. 19, the English-born novelist spoke to *People* at her Beverly Hills home, discussing her years-long battle with breast cancer. この文では Collins を the English-born novelist で言い換えをしている。このように先行詞 Collins より情報の点で詳しくなるような照応表現を特定化の照応表現と言う。収集した 500 例を分類し特定化の照応表現の特徴を調べている。

1.2.4 ^{みょうが} 明日誠「独立句として現れる far from it の語法」

far from にはいくつか用法があるが、そのうち far from it に焦点を当てる。far from it は、it が何を受けるかによって次の 3 種に分ける。① “You’re perfect” “Far from it.” ② “Is he perfect?” “Far from it.” ③ “I’m not perfect. Far from it.” このうち③が典型で、この典型的な用法の独立句(例: Being dyslexic does not mean that one is unintelligent. Far from it.)の例を収集し分析している。

2. 論文集

2.1 ^{いま お やすひろ} 今尾康裕・^{ゆうすけ} 岡田悠佑・小口一郎・早瀬尚子(編)『英語教育徹底リフレッシュグローバル化と 21 世紀型の教育』(開拓社, 2017.4.27)

この論文集は、大阪大学言語文化研究科主催の「教員のための英語リフレッシュ講座」の講師がそれぞれの講義内容を論文にしたものである。この講座は 2002 年から続いており、本稿筆者の私も講師として参加してきた。所収の論文のうち、「第 4 部 言語学・英語学の知識を生かす—適切な理解と伝達のために」の中から本欄に関係のある論文をとりあげる。

2.1.1 岡田伸夫「学習英文法の内容の改善をめざして」

「英語教育界には現行の学習文法の内容が全面的に正しいという暗黙の了解があるが、実際には、現行の学習文法には、間違った規則や語法、多くの例外を伴う適用範囲の狭い『規則』がいまだにあとを絶たない」(p. 178) という見解は本稿筆者の私も長年繰り返し述べてきた。学習文法に採り入れるべき具体例(生産性の高い「される人」の意味の接尾辞 -ee (例: kissee [キスされる人]), 句動詞の接尾辞 -er (例: passer-by, stand-upper), 伝達動詞の役をする go, be, like, is all, 同じことを多様な方法で表現する現象 (Fowler, *Modern English Usage* (1928) はこれを elegant variation という(本稿筆者注))があげられている。

2.1.2 八木克正「英語語法の調べ方・考え方」

教壇にたつ英語教員は、簡単には調べがつかないいろいろな疑問にぶつかるであろう。その時は自身が調べて回答を導く方法を知っておかねばならない。そのための道

具立て(そろえておくべき参考文献), 考え方(具体的問題として副詞の最上級に the をつけるかどうかを文献で調べると記述はまちまちである. それをどう考えるか), 具体的問題(名詞の反復を避ける代名詞 that, who か whom か, it's (high, about) time (that) ~)に続く動詞の形), (読解ではなく)表現のための語法・文法の例をあげている。

2.1.3 小葉哲哉こくすりてつや「形が違えば意味も違う—認知言語学的アプローチから見る総称文」

具体例として, 総称表現 (A tiger hunts by night./ Tigers hunt by night./ The tiger hunts by night./ ?The tigers hunt by night.) を G. Radden & R. Dirven (2007) *Cognitive English Grammar* を基に説明している。「不定冠詞+単数形名詞」は, 任意の要素を取り出し, 集合全体に当てはまることを述べる。「裸複数名詞」は文が述べる特徴が当てはまらない例外の存在を認める。「定冠詞+単数名詞」は集合内の他の要素との対比と同時に, 他の集合との対比を合意する。「定冠詞+複数名詞」は集合から複数の要素を取り出し, 集合の代表とする. 全体をまとまりのあるグループや種として特徴づける場合, 特に人種の特徴を述べる場合に使われるとしている。

2.2 西原哲雄・田中真一・早瀬尚子・小野隆啓たかひろ(編)『現代言語理論の最前線』(「開拓社叢書 29」, 開拓社, 2017.11.25)

2.2.1 八木克正「英語の仮定法研究を見直す—if 節内の直説法と will」

① if 節では未来の事象を表現するのになぜ叙述動詞に直説法現在形を使うのか, ② if 節の中で使われる will, の 2 点について論じている. 結論的には, ①については, 後期近代英語で使われていた仮定法現在が, 現代英語で直説法現在にとって代わられたとする. ②については, if 節内で will を使うことは決して特別なことではなく, 表現の必要性から存在しているもので, will を使っている場合と使っていない場合の意味的な違いこそが論じられるべき問題であるとしている。

2.2.2 早瀬尚子「従属節からの語用論的標識化—発話動詞関連の懸垂分詞構文がたどる新たな構文への道」

granted, speaking of which を具体例にして, 懸垂分詞構文としての用法から, 話題転換機能を果たす中間段階(構文化)を経て, 語用論的標識(命題内容の意味には役割を果たさないが, 発話の解釈に重要な役割を果たす「言語装置」)に変化するプロセスを論じている. granted と speaking of which は過去分詞と現在分詞であるが, 懸垂分詞であり, もともと主節と主語を共有していない. だから独立して構文化しやすい点が共通している. “Oh, *speaking of which*.” (p. 235) や “Speech gives rise to writing,

granted.”のような語用論的に標識化した用法があることは言語の変化の例として語法的にも興味を引かれる。

3. 単著書

3.1 高橋英光^{ひでみつ}『英語の命令文—神話と現実』(くろしお出版, 2017.6.12)

認知言語学と談話機能文法の立場から、これまで余り扱われてこなかった命令文の様々な現象を分析している。「神話と現実」とは、命令文について言われてきた定説や教科書的説明と実際の用法との乖離をさす。命令文が「命令」や「依頼」を表すことすら事実と反するという。命令文は必ずしも「無礼・高圧的」な表現でないこと、時には条件、皮肉、譲歩、威嚇などの目的で使われること、命令文では平叙文と異なる動詞が好まれること、ある種の動詞は「動詞＋1人称代名詞」(例: Cry me a river.)の構造で用いられることが多いこと、命令文が受動態、二重目的語構文、等位構文とどのように融合するか、日本語の命令形と依頼形はどのような特徴があるか、などが論じられている。二部からなり、第I部では記述的調査から理論的考察、第II部では個別の問題(*Be killed by Jill. とはなぜ言えないのか、Cry me a river. はなぜ適格なのか、など)を扱う。本書から、命令文の深さを知ることができる。

3.2 関山健治『英語辞書マイスターへの道』(「ちょっとまじめに英語を学ぶシリーズ1」, ひつじ書房, 2017.7.20)

本書は、学習者が読んでもためになることは間違いないが、教壇に立つ英語教員にとってとても役に立つに違いない。今世紀に入ってから紙の辞書から電子辞書、CD-ROM, Web上の辞書へと変化してきた。本稿筆者の私であれば、紙の辞書なら使用法を教えることはできるが、電子辞書などのデジタル辞書の使用法を教えることなどできない。今ではパソコンからスマートフォン、タブレットに至るまで便利なツールを使ってたちどころにいろいろな検索ができる。単語の意味からはじめて、成句検索はもちろん、全文検索によって、辞書の中身全体から情報を得ることができる。便利な検索方法を身につけて身近にある辞書を使いこなすと、間違いなく英語力がつく。その使い方を教えるのが本書である。

3.3 安武内ひろし^{あぶない}『法助動詞の底力—ネイティブの微妙な気分を伝えるキープレイヤー』(「底力」シリーズ9, プレイス, 2017.8.15)

法助動詞のうち, can, could; may, might; should, shall; will, would; must, have to, have got to の表す意味を質問に答える形式で詳述している。can と could の違いを「現在形と過去形」と言っても何の説明にもなっていないことは言うまでもないが、本書のように、改めて can と could のペア, may と might のペアのように比較すると、そ

の違いの区別が難しいことはよく分かる。It *could* (×*can*) snow late this evening./ It *can* (×*could*) snow even in the desert.// Might (×*May*) Justin be a spy?// Should I have done that? (やるべきだったのだろうか)の意味, I'll come to your house if it will be of any help to you. の if 節の中の will が使われる理由の説明など、傾聴に値することが多い。

3.4 滝沢直宏『ことばの実際2 コーパスと英文法』(「シリーズ 英文法を解き明かす」第10巻, 研究社, 2017.8.21)

コーパスを使ったユニークな文法・語法の研究書である。利用できるコーパスの紹介, コーパスの利用法から始めて, 具体的な問題(-ly 副詞, SOV の語順, 関係詞 what など)の分析の方法と結果を提示する。コーパスを語法研究のための用例収集のツールとする研究と, コーパスを使って統計処理をする研究も広く行われる。本書はその両方を包含する研究方法の道しるべであり, 具体的研究成果の提示である。コーパスをインターネットで提供されているツールを使うのではなく, 生のデータをテキストファイルの形で入手し, 正規表現を使って検索する。例えば -ly 副詞の使用実態と出現パタンを調べる。そうすると, 例えば -ly 副詞+過去分詞+名詞(例: freshly baked bread)のパタンが頻出することがわかる。ここから, freshly の後にはどのような過去分詞が来るか, という個別の -ly 副詞の実態調査へと発展する。

3.5 中島平三『斜めからの学校英文法』(「言語・文化選書70」, 開拓社, 2017.10.20)

大学などで教えられるひたすら4技能の向上に資する英文法(正面からの英文法)に対して, 「例外の多い現象の背後に規則性が潜んでいることに気付かせ, その規則性を大局的に捉える方法を考えさせ, それを通じて考える力を培う」(はじめに)文法を「斜めからの英文法」と呼んで, その実践を展開したものである。文法教育を通じて知力や知性などを鍛えるという考え方は傾聴に値する。扱われた具体的問題は, 5文型, 助動詞, to不定詞, 動名詞, 現在分詞, 過去分詞, 自動詞・他動詞などで, なぜそうなのかという問いかけと答えは知力・知性を鍛えるとしている。

3.6 家口美智子 *Existential Sentences from the Diachronic and Synchronic Perspectives: A Descriptive Approach* (開拓社, 2017.10.28)

本書は, 博士論文(神戸市外国語大学)を基にしており, 科学研究費助成事業の研究成果公開促進費の補助を受けて出版された(Prefaceより)。存在を表す there 構文の形成過程を通時的にたどり, 共時的観点からは, 成句化した there's, there's a letter come to me のような過去分詞を伴う構文, there + exist, there + remain のような be 以外の動詞をとる構文, 英米差(イギリス英語はアメリカ英語より there 構文を高頻度で使

うなど)をコーパスを使って明らかにする。本書によって、there's, there is, there are, there was, there were はそれぞれに語用論的機能が異なること、there's は副詞的不変化詞としての機能を担うこと、there's は通時的には there + is と there + has の両方の縮約形の場合があることが明らかにされた。学術的価値の高い研究書である。

3.7 澤田治美^{はるみ}『意味解釈の中のモダリティ(上)(下)』(「言語・文化選書72」, 開拓社, 2018.3.20)

我が国の英語モダリティ研究の第一人者による、「発話や文の意味を解釈する際にモダリティがどのように関わっているか」(まえがき)の考察である。上巻は、モダリティの定義、体系、多義性、拡大、深化、モダリティの語用論、相関性、透明化などについて、下巻は個別の法助動詞について、行為の非実現性・困難性と同等比較、自発的知覚、心理的衝突、断定と予測、状況の特定性、現実世界領域と言語行為領域、現実性と仮想性について論じる。

つまり、モダリティとは何か、言語研究の中でいつごろから根源的・認識的の分類がされるようになったか、という基礎的なところから、could, can, should, must/should, need, could/might/ must +完了形といった具体的問題についても詳細な議論をしている。

3.8 奥田隆一^{たかいち}『英語語法学の展開』(関西大学出版部, 2018.3.31)

著者は「英語語法学」を提唱してきたが、本書では具体例をあげながら、英語の語法現象をおおきくとらえ直し、英語の用法の現状を考察し、現代英語の用法の分析に新しい視点を提示しているという。Excuse you!, first ginger(親指), I'm tired a lot. の a lot, She loves me not., 婉曲の SOB, Don't "Sir" me., などの表現が取り上げられている。

4. 翻 訳

4.1 本田謙介・深谷修代^{ふかやのぶよ}・長野明子(訳)『英文法と統語論の概観』(「英文法大事典」シリーズ 第0巻, 開拓社, 2017.10.31)

Rodney Huddleston and Geoffrey K. Pullum, *The Cambridge Grammar of the English Language* (2002) (以下 CGEL) の日本語訳第1巻である。「世界最高峰の英文法書」(『英文法大事典』の刊行にあたって) p. v) である原著は分量が多いことに加えて、書かれている英語の格調が高く読みこなすのが難しい。そこにこの翻訳事業の意義がある。総勢52人が全訳した結果が11巻に結実する。本書はCGELの第1章、第2章の翻訳で、全11巻の第1巻目であり、「全体像を俯瞰する役割をはたしている」(p. ix)。

回顧と展望

本書は実証的な業績を扱う本稿の守備範囲を超えるが、もし若い研究者が英文法や語法を研究するのであれば、いきなりコーパスを使って何かを見出そうとするより先に、本書で語られている、規範主義とは何か、話し言葉と書き言葉の違い、さまざまな文法概念、統語論、意味論、語用論などの分野の存在の確認、統語論の基本概観などは、基礎知識として修めておかねばならない。その意味で本稿で紹介した。

4.2 田中^{こうすけ}江扶・中島基樹・川崎修一・飯沼^{よしなが}好永(訳)『形容詞と副詞』(「英文法大事典」シリーズ 第4巻, 開拓社, 2017.10.22)

出版日は4.1であげた第0巻より早い、事の性質上順序を入れ替えて取り上げている。我が国では、形容詞を扱った単著書には小川佐太郎『形容詞』(「英文法シリーズ」第8巻, 研究社, 1954), 大沼雅彦『性質・状態の言い方 比較表現』(「英語の語法 表現編」第3巻, 研究社, 1968), 安井稔・秋山怜・中村捷『形容詞』(「現代の英文法」第7巻, 研究社, 1976), 斎藤武生・鈴木英一『冠詞・形容詞・副詞』(「講座・学校英文法の基礎」第3巻, 研究社, 1984)がある。一方副詞も、他の品詞と共に付随的に扱われている程度でしかない。辞典では小西友七(編)『英語基本形容詞・副詞辞典』(研究社, 1989)がある。しかし、確かに形容詞・副詞に関する研究や解説は少ない。本書では、形容詞と副詞に関して、詳細で網羅的な記述がなされているという主張である。

5. 辞書

5.1 原川博善・島山利一(編集主幹)『ベーシックジーニアス英和辞典』(第2版, 大修館書店, 2017.11.20)

初版は2002年であるから、15年ぶりの改訂になる。改訂とは言え、内容はすっかり違ったものになっている。冒頭は「ピクチャー・ディクショナリー」で、学校、家庭、街、スポーツ、色と形をイラストで英単語や表現を対応させる。本体に続いて、和英小辞典、英文法のまとめがある。「まえがき」によると、主な改善点は以下の通りである。1. 語義区分の見直し・用例の刷新, 2. 語の意味の広がりをつかむコラム・イラストの充実, 3. 語の重要度表示の見直し, 4. 見やすい紙面。

全体を見ると、やはり今の時代に合った構成と紙面づくりがうまくできており、高校生に必要な情報は十分に提示できている。上の3(語の重要度表示の見直し)は本稿筆者の私もかねがね気になっていたところだが、5段階に分けたところは斬新である。発音表記はIPAと片仮名併用方式で、これも時代(発音記号は必須学習事項ではない)に合わせた方法である。

5.2 安井稔・久保田正人『英語クラスターハンドブック—基本単語のつながり用例辞

典』(開拓社, 2017.7.3)

「はしがき」によれば、「本書の主張は「単語数信仰」をやめ、「語のつながり信仰」に大きな路線変更をしなければ、わが国における英語教育の進展は望みえない」という。書名にある「クラスター」(cluster)はこの「語のつながり」のことである。「用例の収集には底本として H. E. Palmer (1938) *A Grammar of English Words* を用い、これに著者たちの判断による様々な修正が施されている」という。確かにかなりの用例は底本から来ている。また、本書は「英語の中級程度の目標」を示しているという。記述方法は、見出し語の後に用例とその日本語訳をあげ、主な用例に詳細な注釈をつける。H. E. Palmer はコロケーションという用語を使って「語のつながり」を学ぶことの重要性を主張したのであるから、それを受け継いだ辞典になっている。

5.3 政村秀實『[図解]英単語イメージ辞典』(大修館書店, 2018.2.20)

約 1400 の見出し語すべてにイメージ図を示し、意味・イメージの説明をつけたところが斬新である。訳語でなくイメージにより意味の全体像を捉えさせ、多数の例文でそのイメージを理解させるというのも斬新なところである。語義は、原義から比喩的な意味の展開で説明し、語義区分はしていない。基本は、イラスト、語義展開、例文の 3 つの構成で、例文は自然だが、かなり高度な語彙が使われているもの(例: Homosexuals shouldn't be persecuted; they are born that way.) が少なくない。だが、新しい試みとして評価できる。

(関西学院大学名誉教授)